

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	中尾薫（演劇学）
-------------	----------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	能と昆劇の比較研究 —芸態変化と相違点の検討による根源的同一性の探究を目指して—
-------	---

派遣期間

2012 年 7 月 26 日 ～ 2012 年 9 月 23 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	中華人民共和 国	香港	嶺南大学（群芳文化研究及発展部）	ステファン・チャン教授

派遣先で実施した研究内容

・派遣先の嶺南大学の群芳文化研究及発展部を拠点とし、嶺南大学のマイク・イングハム副教授（イギリス演劇）、マン・イー氏（中国古典演劇）、香港バプティスト大学のジェシカ・ヨン副教授らとの研究交流を行い、演劇全般、能、昆劇、中国古典演劇についての専門知識の共有と議論の場に参加した。また、その過程で、北京戯曲学院のフーキン教授、京都大学赤松紀彦教授とメールを通じて間接的に交流することもできた。なお、ジェシカ・ヨン氏とは、能と昆劇の動きに着目した研究フォーラムを開催する目的で、具体的にそのコーディネイトをしつつ比較研究を進めた。

・嶺南大学附属図書館、香港中央図書館にて、昆劇に限らず中国古典演劇に関する書籍、とりわけ演劇美学の視点から中国古典演劇を論じた書物を閲覧した。また、膨大な書籍群のなかから、今後参考にすべき書籍、資料についてリストアップを行った。

この際、（１）音楽研究、（２）演劇美学、（３）文学研究、脚本のテキスト研究（４）歴史研究、（５）演技法に関する研究の５分類に大別しつつ、集中的に閲覧・リストアップをしたのは、（２）の演劇美学、ついで（４）歴史研究、（５）演技法に関する研究である。

・中国演劇の多くが、言語・風土の違いによる差異はあるが、共通した演目、演技法、作品後世を持つという観点から、その共通性を認識するため、昆劇以外の中国古典演劇に関する調査をも行った。とくに香港でもっとも盛んな粵劇（広東オペラ）の劇場におもむき、その作品、演出法、観客層などについて、調査した。また、香港のほかにも多くの粵劇院を有するマカオにおいて、劇場調査、および粵劇の上演実態について、調査を行った。ただし、マカオ調査については、今後さらに研究調査の必要がある。なお、粵劇も関する文献調査については、嶺南大学図書館、香港中央図書館などで行った。

・昆劇発祥の地とされる昆山市周辺（昆山千灯、周荘）、および蘇州市において昆劇の発生状況とその後の上演形態についてのフィールド調査を行った。昆山市の古鎮千灯では、昆曲の創始者である顧堅について資料を展示する顧堅記念館、及び古舞台を調査した。また、元・明時代の戯曲文化と水郷文化、貿易商、質屋を中心とする富豪家と昆劇との関連について調査を行った。周荘では同様に、富豪家と昆劇役者とのかかわり、昆劇の享受のありかたについて調査を行った。なお、古舞台調査は、上海でも行っている。

・上海図書館にて、近代中国演劇における演劇改良運動についての文献調査を行い、中国古典演劇とのかかわりについて分析をはじめた。上海図書館では、ほとんどの資料が電子検索できるため、館内のパソコンを用いて、関連雑誌記事のリストアップをした。ただし、そのほとんどが、当時の日中間の演劇分野の人的交流状況、影響関係から日本でも入手可能な雑誌に該当記事が多いことを確認したのにとどまるものも多い。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

研究の当初の目的 研究の当初の目的は、能と昆劇に、どのような違いが認められるか、それは長い歴史の中でどのように変貌してきた結果なのか、その具体像と背景を調査、比較検討することであった。そのため、嶺南大学では、（1）該当分野の研究者との意見公開と知識の共有を行うこと、（2）資料の収集、（3）現代演劇の立場から能と昆劇のメソッドを活用する演出家ダニー・ユン氏へのインタビュー、（4）南京、北京、蘇州などの昆劇の劇団、粵劇の劇団などのとの比較研究を行う計画であった。

計画の達成状況 当初の計画のうち、（1）（2）については、おおむね計画通り達成できた。（3）については、ダニー・ユン氏の都合により、派遣期間内で多くの時間を作れず、達成はできとは言えないが、2012年～2013年度中にかけて交流を続けていくことで話を進行させている。（4）については、南京江蘇省昆劇院の内部事情、日中間の政治的関係の悪化の影響もあり、計画を変更せざるを得ず、蘇州、マカオにて昆劇、粵劇に関するフィールドワーク、上海にて近代資料の収集などを行い、当初の計画とは異なるものの、成果はあった。

明らかにできた成果 中国における昆劇研究の実情（音楽研究に重きがあること、演劇哲学（美学）分野にすぐれた研究があること）が明らかになり、中国演劇における演劇構造、主題、人物造詣、動作（振付法）と能との相違点について、明らかにすることができた。

派遣後の研究発表の予定

「記憶、場所、対話 2012～能と昆劇、現在と未来～シンポジウム「能の体、昆劇の体」」（2012年10月12日、於：座・高円寺）のセッション2「研究発表「舞台にみる能と昆劇の動きの象徴的意味」において、ジェシカ・ヨン氏との共同比較研究を行い、そこで本派遣の成果の一部として、個別研究発表「能の歩みにおける象徴的意味」を行った。この成果は、早稲田大学演劇博物館連携研究拠点事業の報告書の形で刊行する計画もしている。